日本音楽集団 1981年度前期定期コンサート・シリーズNo.65

外国人による作品特集その一

構成　三橋貴風

Yu（幽）from Haiku by Matsuo Basho

作曲　H.J.Koellreutter コルロイター　（西ドイツ）

Worlds for solo Koto

作曲　Neil Mckay ネイル　マカイ　（ハワイ）

和楽器室内交響曲

作曲　David Loeb ディヴィッド　ローブ　（アメリカ）

交織

作曲　ネプチューン・海山　（ハワイ）

Seita

作曲　Pehr Henrik Nordgren ペール　ヘンリック　ノルドグレン　（フィンランド）

十面埋伏（委嘱初演）

作曲　王　燕樵　（中国）

賛助出演　増田睦実（ソプラノ）
友情出演　ネプチューン・海山（尺八）
指揮　田村拓男
主催　現代邦楽協議会・日本音楽集団

1981年6月12日〈金〉午後6時30分開演　青山タワー・ホール　地下鉄銀座線外苑前下車

入場料＝当日売2500円　前売2000円　団体割引1500円（10人以上の団体の場合事務所で取扱います）　友の会割引あり　会員募集中
チケット取扱い＝渋谷東急プレイガイド・新宿チケットビューロ・銀座鳩居堂・日本音楽サービス（テレフォンサービス 03-409-5374）
お問い合せ＝日本音楽集団　東京都渋谷区神宮前6-16-14小早川ビル　電話03-409-5374（代）

プログラムによせて

音楽とは通訳のいらない世界共通語であることは、今更言うまでもありませんが、海外における邦楽の演奏も最近では珍しいことでは無くなりました。「真に民族的なものは真に国際的である」、とよく言われますが、私たちの民族音楽及びその楽器が今後益々、真に国際的になって行くためには、世界の他地域でそれを披露するだけでなく、お互いにその創作における交流も進めて行く必要があるでしょう。現在までに様々な演奏団体や個人の方々が外国の作曲家に委嘱をした作品も大分増えてきた様です。それらの中には西洋楽器とのアンサンブルのための作品もありますが、今回は邦楽器のために書かれたものだけを特集してみました。

プログラムは、日本音楽集団が初めて演奏した外国人の作品であり、一九七二年の第一次ヨーロッパ公演の折に西ドイツで演奏した、コルロイター作曲の〈YU〉、ハワイ大学教授のネイル・マカイの箏のための作品〈Worlds〉、集団には馴染み深い作曲家ディヴィッド・ローブによる〈和楽器室内交響曲〉、尺八奏者としてジャズなどに取り組み活躍しているネプチューン・海山作曲の〈交織〉をご本人の演奏で、又、「邦楽4人の会」の委嘱作品であるノルドグレン作曲〈Seita〉、そして現在来日中の北京中央楽団の作曲家王燕樵氏に委嘱した〈十面埋伏〉、といった内容です。尚、当日会場に来ていただける作曲家の方々にはお話等を伺いながら、その作品を聴いていただこうと思っています。

このようなコンサートを今後もシリーズとして続け、世界の多くの地域の方々の作品をご紹介して行こうと思っております。当日の会場には、皆さんがハッとするような新鮮な音楽空間が広がるかもしれません。どうぞご期待下さい。

（三橋貴風）

日本音楽集団の演奏者

笛　藤崎重康　西川浩平
尺八　宮田耕八朗　坂田誠山　三橋貴風　福田輝久　田嶋直士　竹井誠　米澤浩　水谷雅康
胡弓　畦地慶司
三味線　太田幸子　加藤洋
琵琶　半田淳子　田原順子
箏　坂井敏子　白根きぬ子　宮本幸子　吉村七重　花房はるえ　木村玲子　内藤洋子　熊沢栄利子　滝田美智子　松本和美
打楽器　堅田啓輝　黒坂昇　石崎信宏

日本音楽集団推薦

琴・三絃・十七絃・二十絃

琴光堂和楽器店

〒152 東京都目黒区碑文谷2-19-15 ☎東京03-792-8481 横浜045-363-5448

中島　隆

外国人による作品特集　その一

日本音楽集団1981年度前期定期コンサート・シリーズ№65

◉1981年6月12日（金）　午後6時半開演　◉青山タワー・ホール

構　成＝三橋貴風

一、Yu（幽）／H. J. コルロイター作曲

Vocal＝増田睦実（客演）
笛＝西川浩平　尺八Ⅰ＝坂田誠山　Ⅱ＝福田輝久　Ⅲ＝水谷雅康
三味線＝加藤洋　琵琶＝半田淳子　箏＝熊沢栄利子　十七絃＝松本和美
打楽器＝黒坂昇　指揮＝田村拓男

二、Worlds for Solo Koto／ネイル・マカイ作曲

第一章（Pengawit）木村玲子　第二章（Veränderungen）花房はるえ
第三章（Ai）吉村七重

三、和楽器室内交響曲／ディヴィッド・ロープ作曲

笛Ⅰ＝藤崎重康　Ⅱ＝西川浩平　尺八Ⅰ＝三橋貴風　Ⅱ＝田嶋直士　Ⅲ＝米澤浩
三味線＝太田幸子　琵琶＝田原順子
十三絃箏＝滝田美智子　二十絃箏＝吉村七重　十七絃＝木村玲子
指揮＝田村拓男

……　休　憩　……

四、交織（Mixed Weave）／ジョン・ネプチューン海山作曲

尺八＝ジョン・ネプチューン海山（客演）
箏＝花房はるえ　十七絃＝内藤洋子　打楽器＝堅田啓輝・黒坂昇

五、Seita ― 尺八・二面の箏・十七絃のための ―

尺八＝宮田耕八朗　箏Ⅰ＝白根きぬ子　Ⅱ＝坂井敏子　十七絃＝宮本幸子

六、十面埋伏／王燕樵作曲

笛Ⅰ＝藤崎重康　Ⅱ＝西川浩平
尺八Ⅰ＝宮田耕八朗　Ⅱ＝福田輝久　Ⅲ＝坂田誠山　Ⅳ＝田嶋直士　Ⅴ＝三橋貴風
Ⅵ＝竹井誠
胡弓＝畦地慶司　三味線Ⅰ＝太田幸子　Ⅱ＝加藤洋　琵琶Ⅰ＝半田淳子　Ⅱ＝田原順子
二十絃箏Ⅰ＝吉村七重　Ⅱ＝内藤洋子　Ⅲ＝滝田美智子　十三絃箏Ⅰ＝坂井敏子
Ⅱ＝花房はるえ
十七絃Ⅰ＝宮本幸子　Ⅱ＝木村玲子　Ⅲ＝熊沢栄利子
打楽器Ⅰ＝堅田啓輝　Ⅱ＝黒坂昇　Ⅲ＝石崎信宏　Ⅳ＝西和美
指揮＝田村拓男

一. Yu（幽）

「幽」は単に松尾芭蕉の俳諧四句を音楽化したというだけではない。この作品は俳句の形式をそのまま基礎としているのである。俳句が五・七・五の十七音を本体としているように「幽」も七つの音の像に対して十七の音記号を持ち、それが十五・二十一・十五の音節関係を保っている。

やはり俳句と同じように、全体的構造を基としているのが「幽」の特徴である。つまり明確に位置づけられるような二元論、例えば協和音と不協和音、拍子の強弱、対照的主題のグループ、旋律と和音、和声と対位法等は見当らない。音の連続の中に短い音、長い音、あるいは音の拡がりが非和声的な時間関係の中にあるのみである。

特に「幽」においては、音の体験というよりは、むしろ音によって意識に浮び上がってくる静寂の体験の方が重要である。音の響きから、響かざるものが認知される。そしていま再びこの静寂に依って、有限な現在の輝きが開花するのである。
「幽」は表現の無い表現、沈黙の祈りともいえるであろう。

（元ドイツ文化研究所所長　H. J. コルロイター）

この作品は1971年の日本音楽集団第13回定期演奏会で初演され、翌年の第一次海外公演の折に西独のケルンでも演奏された。

二. Worlds for solo Koto

「Worlds」は、ハワイ大学の作曲の教授、ネイル・マカイ氏が箏の為に書いた3つの楽章からなる作品である。

第一楽章のPengawitは序奏の意味で、プリペアードされた箏により演奏される。また奏者は左手に鈴をつけて、いかなる動作によっても鳴る様に工夫されている。調絃はジャワのガメラン音楽を彷彿とさせるペンタトニックに定められる。

第二楽章　Veranderungen（変奏）は、独特の音列により結果的に特徴ある柱の配列が出来上がっている。また奏法の面でも、音響的な可能性として胴の部分を打つなどの試みも行われている。

第三楽章　Ai は日本語の藍であり、空とその青さと関係があるのだが、作曲者はニグロのブルースのスタイルの曲にこの言葉の表現を使っている。箏の調絃はC音の自然倍音に基づいている。

三. 和楽器室内交響曲

「和楽器室内交響曲」を日本音楽集団のために、1976年の夏京都で作曲し、その秋ニューヨークで書き直した。昔の「管絃」にならってアンサンブルを管楽器と絃楽器5人ずつにわけた。

第一楽章は「管のテーマ」と「絃のテーマ」の両方があり、展開部でそれを発展させた。第二楽章はパッサカリア。第三楽章はロンド形式で終りの部分に第一楽章と第二楽章のテーマが再現されている。

（ディヴィッド・ローブ）

作曲者のディヴィッド・ローブ氏はアメリカのニューヨーク市にあるマンネス音楽大学とカーチス音楽大学の作曲科の教授をしておられ、私達日本音楽集団の団員にもよく作品を贈って下さるので、とても馴染みの深い作曲家です。同氏の日本の楽器に

対する熱心さは、例えば尺八の譜面等を各流派のロツレ式で書くことができるほどのものです。

この曲は1978年の日本音楽集団の第48回定期演奏会の折に初演されましたが、今回は再演になります。

四．交　　織

交織とは色々なものが織りなす綾、という様な意味であり、外国から来た人間が尺八を吹くという事もそうであるが、それ以上に日本の楽器と他の国との音楽的要素の融合、絡み合いという様に理解して頂きたい。

この曲は1979年の1月に作曲したものだが、これからも種々の異なった国々のカルチュアーを取り入れ、それを土台にした新しいフュージョンミュージックを創って行きたいと思う。　（ジョン・ネプチューン海山）

ネプチューン海山はハワイ大学の出身で、1971年に尺八を始め、現在東京に居をかまえて、演奏や作曲の他にも、尺八に関する英文解説書を著わす等、意欲的に活動されている。

五．Seita——尺八・二面の箏・十七絃のための

この曲は1974年に、ヘルシンキ・フェスティバルに招かれた「邦楽4人の会」がフィンランドの作曲家、P.H. ノルドグレン氏に委嘱したもので、同氏の日本楽器による第三番目の作品となる。

ノルドグレン氏の手紙によれば「〝Seita〟は、ラップ系のフィンランド語で、物神《霊が宿って魔力を持っているとして崇拝される木像や石など》を意味している。私は自由にラップランドのペンタトニックの旋律を素材にするが、それは日本の伝統楽器に、よく合うと思った。」と述べている。

（以上「邦楽4人の会」第35回定期演奏会プログラムより）

国内における初演は1978年3月9日東京イイノ・ホールにて行なわれている。

六。十面埋伏

「十面埋伏」という曲は、有名な中国の琵琶の古典であり、中国音楽の黄金時代——隋（A.D. 589～619）の時代にすでにあったといわれ、後の時代の文献にも、有名な琵琶奏者がしばしばこれを演奏し、〝天を驚かし地を動かす〟程に音色が豊かで人々を魅了したと記されている。

中国の古典音楽は文曲と武曲に分かれ、文曲は情感の細かい旋律の美しいもの、武曲は猛々しく、リズムのはっきりしたものである。この「十面埋伏」はこの武曲の一つであるが、中国歴史上有名な項羽と劉邦の最後の戦い〝垓下の戦い〟を写実的に描いたものである。その戦いにおいて劉邦の策士、張良は、楚軍の周りで楚の歌を唱い楚軍の兵を郷愁の念へとかりたてるという心理作戦により、楚軍の意気を消沈させた。また大将、韓信は、〝十面埋伏〟戦法（楚軍を十方で待ち伏せし封じ込める）により楚を打ち、項羽を自殺へと追い込み、漢王朝成立へと導いたのであった。

この曲は内容的に布陣、軍楽、埋伏、小戦、大戦、項羽の自殺、漢の勝利等に分け

る事ができる。この原曲にあたる古典は、過去から現在に至るまで大きな変遷を遂げて来ているが、私は以前からそれを整理してみたいという構想を持っていた。今回の機会に、日本の方々に中国の古典音楽を紹介できたらという考えでこの作品を書いたが、元来が琵琶の独奏曲であるために、多くの新しい内容を、紀元前の音楽であるという設定の下に加える必要が生じた。そして私自身が今までに聞いたり研究してきた中国の古代の旋律を大量に補充した結果、〝埋伏〟及び〝項羽の自殺〟の部分は原曲とは大幅に違ったものになった。決して満足できる作品とは言えないが、日本の楽器に初めて接触し、作曲の勉強をするチャンスを与えて下さったことに対し、心から感謝を申し上げたい。　（中国北京中央楽団作曲家　王燕燕・訳　松村なほ子）

ご　挨　拶

本日はお忙がしい中を御来場下さいまして誠に有り難うございました。

今回の特集では委嘱曲を除いて、主に欧米の作曲家の作品が多かった様です。次回にまたこのシリーズを行う時には、世界のもっと異った地域、例えば中近東や東南アジア諸国等の、箏や尺八或いは琵琶の同族の民族楽器を持つ国々や、その旋法までが大変に東洋的であるフォルクローレを持つ中南米の作曲家の作品を取り上げる事が出来たら、と思っております。

このコンサートをお聴きになり、海外の作曲家の方々が、私達日本人の民族楽器やその音楽に対して、様々なイメージを持ちながら作品に臨んだ事がお分り頂けた事と思います。

今後もこの様に外国の方々の手による作品が数多く増えることにより、私達の民族音楽も益々国際的になって行くのではないでしょうか。

最後に今回のコンサートの為に御無理をお願いし、素晴らしい曲を書いて下さいました王燕燕先生、そして通訳の松村なほ子さん、また快く御協力頂きました「邦楽4人の会」の北原篁山先生、ネプチューン海山氏、他の方々に心より御礼を申し上げます。

どうもありがとうございました。　　三橋貴風